

---

# 嵐世の家

ソウイチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嵐世の家

### 【Nコード】

N5313Z

### 【作者名】

ソウイチ

### 【あらすじ】

家族とともに世界を旅する青年ダカーム。彼の側にはいつも、植物との合いの子である実子、スイの姿があつた。タキスア嵐をこの世界から無くすよう神に直訴するため、霊峰ホセを訪れた彼ら。そこで目にしたのは、あらゆる厄災から守られた地上の楽園、シエミニ領地だった。

これは嵐の世界で紡がれた、ひとつの家族の物語。《過去に作成したものを改稿した作品です》

？ 嵐

少年がいた。白い大樹の傍らに、ただひとり。

黄昏の中、冷たく固い地面に腰を下ろし、早鐘を打つ心臓を押さええている。

ここは寂しすぎるんだ。だから俺の血が止まらないんだ。まるで  
お前も仲間に入れと、散乱した倒木と生き物たちの骸と同じように  
朽ち果てると、そう大地に誘われているようだと、彼は思った。

小高い丘の上になった一本、白骨のようにすべての葉を散らして  
幹と枝だけになった大きな樹が立っている。張り出した根に背中を  
預け、まだ十二歳前後の少年が襟襖ほろを引っかけたままへたり込んで  
いた。大きく荒い息に混じり、時折、ぱたり……ぱたり……、と血  
が滴る音が鳴る。大樹の白い根は少年の血で真っ赤に染まっていた。  
周囲に動くものはない。黄昏時の濃い影の下では、無数の死骸が  
うずくまっている。あらゆるものが地面に這いつくばって大地を覆  
い、辺りは、さながら骸の小平原と化していた。

少年は、白い大樹の強烈な存在感に惹かれてここにやってきた。  
名を、ダカームという。

彼は右手を掲げた。二の腕表面に浮かぶ人の目を模したような紋  
様が、腕の動きに合わせて奇妙に歪む。

「おまえといえると安心する」

口が勝手に開いた。返事がくるはずがないとわかっているのに、  
息をすれば言葉が自然とこぼれた。

「ここは寂しいけれど、おまえは樹だけど、喋れないけど、聞いて  
くれ。俺は逃げてきたんだ。追い出されて逃げてきたんだ。すごく  
悔しかったんだ。初めて家族が欲しいと思ったから、だからとても  
悔しかったんだ」

風すら吹かない。ダカームの体からは規則正しく、血が流れていく。

「家族が欲しい。おまえ、俺の家族になってくれるか？」

そうつぶやいたとき、風がないのに枝が震えた。

白かった樹の表面を、少年の血が凄まじい勢いで逆流していく。目を見開くダカームの前で、大樹は枝の先端まで朱の線で彩った。空にいつのまにか奇妙な形の雲が浮かぶ。彼の持つ紋様よりもずっと細かな輪郭を持った、人の目を象る雲。

次の瞬間　大樹の天辺とダカームとのちょうど中間に、輝く光の繭が生まれた。

繭はダカームの腕に収まると唐突に弾けた。血で汚れた手に抱いたのは小さな幼子だった。線が細く、髪は柔らかで、肌が白い。ぎこちなく抱きかかえる彼の視線が、ふと、ある一点に止まった。

右腕。白緑の鳶が肩から指先まで伸びて、腕の形を作っていた。

恐る恐る、触れる。ぴくん、とその異形の腕が反応した。くぐもった声を漏らし、幼子が胸に寄りかかってくる。齢にして三つ、四つにはなろうかという幼子の体はずっしりと重たく、ダカームはよろけた。

「これはもしかして……<sup>ミテュー</sup>出産……？」

生きとし生けるものすべてに与えられた、神の奇跡。これまで、奇跡は常に人との間にのみ生まれるものだと思っていた。

真つ赤な手で顔に触りかけ、慌てて襟褸で拭う。すでに傷の痛みも重度の疲労も感じなくなっていた。

「おまえ、母になってくれたのか？　俺を父として、子呼び出してくれたのか？」

齢十二の少年は尋ねる。大樹は答えない。代わりに天空の雲が、じつと少年を見下ろす。

「家族。これが、俺の」

震えながら幼子を抱きしめる。異形の腕など気にならなかった。なぜなら、少年自身もまた、他と異なる者として追放された身だっ

たから。

幼子の匂いを全身で感じ取るように抱きしめたダカームの顔が、ふいに上がる。その目が大きく見開かれていた。

周囲にひとつ、またひとつと　小さな光の粒子が立ち昇り始めた。艶やかな金色の光もあれば、鈍くくすんだ灰色の光もある。ただの丸い粒にしか見えない光もあれば、複雑に絡み合った美しい模様を見せる光もある。そうした諸々が屍並ぶ平原の至る所で生まれ、集まり、螺旋を巻き始めていた。

そのとき初めて、遙か遠くからも同じような光の渦が近づいていくことに気付いた。

タキスア  
「嵐」

つぶやく。幻想的という言葉からは遠くかけ離れ、暴力的なまでに肥大化し汚く濁った、それは竜巻だった。

周囲ではさらに、小さな竜巻がいくつもいくつも形成されていく。中には互いに融合し、巨大化していくものもあった。幼子を抱えて立ち上がるうとしたダカームは、途端に立ちくらみに襲われた。流した血の量が彼の体から自由を奪っていた。

「逃げないと……逃げるんだ。早く。すぐに」

幼子を背に負う。荒野の中、たつたひとりでここまでたどり着いた自分の肉体には自信があった。だから両足が情けなく震えて、顔面が冷や汗で埋め尽くされて、そんな無様な自分の状態を悟った彼は、柄にもなく大笑いしなくなった。

ばしゃん、と血だまりを蹴った。駆け出すと後は一息だった。走るしかない。止まれば飲み込まれる。嵐に飲み込まれることは、すなわち存在の消滅だ。

世界に音が溢れてきた。強い風が互いにぶつかり合う、歪んだ音。死にたくなかった。それ以上に背中の中を重さを失いたくないと思った。

まだ完全に竜巻となりきっていない光の螺旋を抜け、丘となって隆起した地面を駆け上がる。天辺で小石のひとつにつまずき、さら

には斜面を転がるように倒れ込んだ。全力で背中の幼子だけはかばったが、衝撃に驚いたのか、彼の子は勢いよく泣き出した。細い腕で目元を拭う仕草は、まるで喧嘩に負けて悔しがっているようにも見えた。

自分の腰ぐらいの身長の子を宥める術を知らず、ダカームは黙って幼子の右手を握った。蔦が寄り集まったその子の手は、人の肌よりも冷たく、固かった。

子の手を引いて、元来た道をゆっくりと、慎重に引き返した。嵐の様子を探るためだ。

丘の天辺に立ったとき、少年は自らの行いを後悔した。

幾本もの小さな竜巻を吸収し、さらに巨大化した嵐が、母たる大樹を飲み込む瞬間に出くわしてしまったのだ。暴風の塊と化した漆黒の風柱は大樹を周囲の地面ごと飲み込み、一瞬のうちに粉碎してしまった。

巻き上げられ、めちゃくちゃな回転を繰り返し、無限にも感じるほど長い時間をかけて宙でいたぶられ　そのまま、無慈悲に落下した。

地面にぶつかり、跳ねる。

黄昏の濃い影の中では、それっきり、他の残骸と見分けがつかなくなってしまうた。

嵐は、悠々と彼らの前を過ぎ去っていく。余波の風が檻を撫で、髪を逆立たせた。大樹から生まれた子がぴたりと寄り添う。ダカームは喉が震えて上手く息ができなかった。我が子を握る手に、ただただ力を込めるしかなかった。

嵐は、やがて消えていった。少年たちの眼下には、やはり、何も残らなかった。

そう。

これはよくある光景。

タキスア

嵐 『神の箱庭』と呼ばれる世界にあつて、全てを蹂躪し、無

に返し、そして何事もなかったかのように消えていくもの。人に定  
住を許さず、常に過酷な環境での移動生活を強いる、普遍の理。こ  
れもまたすなわち、神の奇跡であつた。

だが彼は誓つた。

負けないと。

自らに与えられた力にかけて、必ずこの光景から脱してみせると。

そう。

タキスア

これは嵐の世界で紡がれた、ひとつの家族の物語

あれから十五年。

大地の鳴る音が聞こえる。頬を引っ掻くように吹き抜けていく風が、次第に湿り気を帯び始めていた。滴る汗はやけに冷たい。

風化した巨岩を踏みしめ、ダカームは振り返った。浅黒い皮膚は砂埃で白く汚れ、その下からは際限なく汗がにじみ出ている。貴重な水分が顎先から一滴、一滴と落ちていく。二十七となった彼の肉体は、かつての線の細さとは無縁の逞しさを身につけていたが、その表情に余裕はなかった。

辺りは見渡す限り白い崖壁で囲まれていて、折り重なった岩の斜面の他は歩く場所すらない。

霊峰ホセ　世界でもっとも高く険しい山と、それに連なる長大な山脈。

そのただなかにダカームはいた。

誰も寄りつかないと言われる場所である。草木もない、獣もない、あるのはただ厳しい自然だけだ。

ダカームの目的地は、その遙か先にあるホセの頂だった。

「スイ。大丈夫か」

背中に声をかける。彼は少年を一人背負っていた。十代も後半に成長した、彼の一人息子である。少年期の父をそのまま大きくしたような、線の細い少年である。スイは長い睫毛を伏せながら無言のままダカームの背に体を預けていた。脱力しているためか、それともダカームの体力が落ちていたためか、ずっしりと重かった。

大地の鳴る音は止まない。

ダカームの背にはスイだけでなく、彼が背負っていた背囊もある。



歯を食いしばり、彼は再び足を前に踏み出した。

一步ごとに疲労感が全身を駆け巡る。歩みは遅く、遅々として進まない。

ダカームはこれまで自分たちが歩いてきた道を見た。

白い絶壁と青く抜ける空の下で、ひとつの巨大な影が蠢いていた。時折表面を紫電が走り、空気を切り裂いた音が遅れてダカームの耳まで届く。地鳴りの正体は黒い影が岩肌を削りながら進行する音だった。

巨大な、あまりにも巨大な竜巻が、その身を狭い溪谷に押し込めるようにして進んでいた。<sup>タキスア</sup>嵐である。

想定外だった。本来ならばもっと日数をかけ、徐々に徐々に山頂を目指すつもりだった。なのに、嵐はダカームたちをあざ笑い急ぎ立てるように追ってくる。嵐から逃れるため、予定していた旅程を無視して先を急いだ結果、ダカームもスイも、極度の疲労を抱えることとなった。

「ダカ……ム……」

「スイ……！」

弱々しい声を聞き、ダカームの足が止まる。彼の衣服を強く掴み、スイは言う。

「この距離じゃ……もう間に合わない、よ。引き返そう。だいじょうぶ、ぼくたちの預言<sup>コメック</sup>なら、その崖から飛び降り、ても、命までは失わないさ。きつとね、へへっ……」

スイは震える指で切り立った崖の先を示した。底が霞んで見えなほどの標高だったが、確かに、自分たちに与えられた力を持つてすれば最も早くこの場から離脱できる方法だと思った。たとえスイを抱えていても底までたどり着く自信が彼にはある。

だが、ダカームは頭<sup>かぶり</sup>を振った。

「ホセは『神の目』<sup>スナヌ・フ・ウエイ</sup>に最も近い場所。訴えるならそこしかない。ここまで来て逃げるわけにはいかない」

「本当に、頑固だなあ……ぼくの父さんは。これと言ったら、ぜん

ぜん、変えないんだもの。効果があるかなんて、わかんないのに、さ」

「嵐をなくすためなら、何だってやってやる」

「口癖だよ、ね……母さんも呆れるわけだ。でも、こんな無茶ななくて、も、いいんだよ？」

「無茶じゃない」

ダカームは言い切った。その証拠にと、力強く一步を踏み出す。

「お前が平穩に暮らせるようになるのなら、どんなことだって無茶じゃない」

「……まったく、もう……」

いつのまにか上空が薄暗くなっていた。まるで傷口から鮮血が溢れ出てくるように、青かった空が濁った灰に変わっていく。山頂に到着するまでにやり過ごせるだろうか。

『神の目』は、文字通りこの世界を形作った神が下界を俯瞰している姿だ。その神に最も近い位置にあるホセの山頂で、自分たちを襲う嵐を止めるよう直訴する。それがダカームの目的であった。スイが生まれ、その母が無残にも散った日から十五年。ダカームは嵐を止める方法を見つけようと、世界中を旅してきた。だが嵐を受け入れて生きてきた人々から有益な情報を得ることなどできなかった。

もう二度と、大切な者を嵐になぞ奪わせはしない。その思いが、ここまでダカームを歩かせている。

ふと、背囊が動いた。内側から器用に封を外し、一匹の猫が顔をのぞかせる。藍色の毛並みに白銀の筋が混ざった、美しい猫だ。

「ユッセルノ」「母さん」

「なあー」

ダカームたちの声に応え、ユッセルノは髭を細かく震わせた。大きな金色の瞳で眼下の嵐を見つめ、鳴く。家族としてともに生きてきたダカームたちには、彼女が言っていることが手に取るように伝わってくる。

「なあご、にゃあー」この感じ、どうやら嵐と言えども山岳高所は苦手のようだね。

「ここまで上がって来ない？」

「にゃ。にゃ」おうさ。ただ毒雨には気をつけな。

「急ごう」

ダカームは遙か山の頂を見上げた。嵐によって生まれた雲に隠れ、山頂は霞んでしまっている。氣力を振り絞り、道無き道の登攀を再開する。

「ダカーム、これ」

差し出されたスイの手には、親指の先ほどの大きさの緑色をした丸い粒がある。両手が自由にならないダカームに代わり、スイが口元にその粒を近づける。

「種<sup>×コム</sup>だよ。これで少しは、楽になる、でしょ？」

「お前が食べる。まだ息も絶え絶えだろう」

「体を動かしているわけじゃ、ないもの。このまま大人しく、体力回復に、努めるよ」

「だが」

「ほら。食べて」

「……ん」

我が子の言葉を聞き、ダカームは差し出された種を口に含んだ。そのまま噛み砕き、咀嚼する。胃に落とし込むと、すぐに活力が全身に広がっていった。

種は貴重だ。ごく限られた場所、条件の下でしか採種できない。

その分効果は大きく、食糧として口にすればたちどころに疲労が回復し、また別の使い方をすればあらゆる厄災から身を守る『家<sup>オヒクフ</sup>』にもなる。種の個数は旅程の長短に、種の有る無しは生命に、それぞれ直結するというのが、ダカームら世界を旅する者の常識であった。

やがて雲に入る。視界が極端に悪くなり、皮膚にまとわりつく水分がぴりぴりとした刺激を与えてくる。この雲に含まれた水は毒を含んでいるのだ。これも嵐の特徴だった。

スイが呻いた。我慢しようとして、堪えきれなかったような声だった。体の一部が植物でできている彼にとって、嵐の毒水は常人以上に体に負担がかかる。

「突っ切る。ユッセルノ、指示をくれ」

「にや。に」耳かっぱじって、集中しな。あたしの合図、漏らすんじゃないよ。

ホセに登山道などない。剥き出しの岩場の上は、一歩間違えばたちまち岸壁を転がり落ちるほど不安定だ。その先に待っているのはあらゆるものを無に返す嵐。しくじれば助かる見込みはない。

ダカームは地面を蹴った。脚の筋肉が軋み弾ける音まで聞こえてきそうなほど、全力で岩場の斜面を駆ける。

あるうことか、彼は目を閉じていた。

ユッセルノがダカームとスイとの間に滑り込み、体を固定していた。ダカームの耳元で髭と耳を細かく震わせながら、絶妙の機で彼に合図の声を送る。人間より数倍鋭い感覚と才気豊かな知能を持つ彼女は、この雲の中でも進むべき道を捉えていた。一歩進むごとに雲が帯となって背後に流れていく。

まさに、疾駆

視界に光が戻ってくる。重く纏わり付くようだった雲が薄れ、細かな霧のようになり、やがて霧散する。体の芯から凍えるような風が一阵、吹き抜けていった。

嵐を抜けたのだ。周囲の光景は一変していた。

視界を覆う景色の白さは変わらない。だが足元の石はまるで砂のように細くなり、足あとひとつないならかな丘陵が頂上まで続いていた。真横からやってくる風に、山肌の砂が浮き上がって陽炎のように揺らめく。山の白を越えると、そこは深い深い空の蒼が広がっていた。首を巡らせ、自分たちよりも遙か下に雲海が広がっていることを確認する。

ふと、背中のスイが震えていることに気付いた。毒水に打たれ、なおかつこの凍てつく風に当てられて消耗しているのだと悟る。

「ユッセルノ、種を」

相棒に声をかける。彼女はスイの顔色を探り、その頬に鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。薄目を開いたスイは軽く微笑んだ。

ユッセルノがダカームの頬を尻尾で軽く叩いた。

「じゃあ」いいから先を急ぎな、ダカーム。

「しかし」

ぱしん、と叱咤するような一撃。ダカームは不承不承口を閉じた。まだスイの体調は保つから種を温存しろという判断なのだ。そう頭では理解できても、気持ちは落ち着かなかった。

小走りに駆け出す。岩場とは違い、踝まで砂の中にめり込む大地は非常に走りづらかった。それでも何とか、平に開けた最上部へと到達する。

スイと背囊を下ろし、ダカームは頭上を見上げた。広がる蒼穹のただなかにくつきりと、人の目を象った奇妙な雲が浮かんでいた。その余りの巨大さに、ダカームは息が詰まる。『神の目』は瞬きすることもなく、ただじっと地表の人間たちを見下ろしていた。

にや、とユッセルノが足元で鳴いた。ひとつ深呼吸をし、肺に冷たい空気を取り込んで、ダカームは意を決した。

「神よ！ 俺はあんたに言いたいことがある」

大声を張り上げた。作法などない。ただ自分の想いをぶつけるだけだ。

「俺たち家族はこれまで何度も嵐で辛い目にあってきた。嵐があるから、俺たちは生きること必死にならないといけない。なぜだ。神はなぜ嵐など生んだ」

空に向けるだけの声はどこにも届かない。喋る先から空気に飲み込まれてしまうようだった。

「俺たちは神に一番近い場所までやってきた。すべて、俺たちの願いを聞き届けてもらいたいためた。嵐をなくせ。俺たちに平穏を与えろ！」

高圧的な言葉。だがダカームは態度を変えるつもりはなかった。

ここで卑屈になれば、今まで必死に生きてきた自分とその家族を裏切ることになる。彼は思っていた。十五年前、無残に散っていった白き大樹の姿を忘れたことなどないのだ。

家族以外の者に優しさは不要。いつだって、誰にだって牙を剥く。それが、ダカームがこの十五年で身に付けた生き方だった。

風が地表を撫でる音がやけに遠く感じられる。ダカームたちは固唾を呑んで空を見つめていた。

しかし、何も起きない。

蒼穹には何の変化も起きない。

「……駄目、なのかな」

スイがつぶやく。背囊から出てきたユッセルノが、軽い足取りで斜面を走る。眼下に広がる雲海を眺め、そこに微かな黒い色を認めて、彼女は慨嘆がいたんした。

「にやああお！」嵐は消えてない。神ってやつは、とことん薄情者みたいだね！

ダカームは大きなため息をついた。巨大な『神の目』を真っ向から睨みつけ、そして踵を返した。

「今日が駄目なら、明日も訴えるだけだ。スイ、ユッセルノ。とりあえず今日のところは体を休める」

「ぼくが家を作るよ。何もしないよりかは、気が紛れるから」

青白い顔にぎこちない笑みを浮かべ、スイは腰袋から種を取り出す。ぐつと握り込んでから地面に置くと、種は微かに振動を始めた。地面が淡く色を持ち、種に無数の亀裂が走る。やがて何も無い中空に碧の光が現れ、細い糸となってひとりでに形を編んでいき、翡翠色に薄く輝く、一張はじの大きな天幕となった。『家』オビクフである。

ユッセルノが側に来る。

「にやあ」いつまでここで神に喧嘩を売り続ける気だい、ダカーム？

「神が俺たちの要求を聞き届けるまでだ」

「にー、にやああお」あんたのことだ、あたしらがあとどれくらいこの場に留まっていられるか、考えていないわけじゃないだろう？

「……」

「なあう。にや。みいー」保つてあと二日、帰りを考えないならあと五日。それがあたしの見立てだ。覚えといってくれ。

ダカームは無言でうなずいた。

家の中からスイが呼んだ。やはり落ち着くのか、若干血色が良くなっている。それを見て、ダカームも少し表情を緩めた。

「スイの濡れた服を乾かそう。それから水。落ち着いたら体を揉んでやろう。ここは空気が薄いから早めに休ませないとな。体が保たないだろう。スイはよく頑張った」

「……にー」あんたの子煩悩ぶりには頭が下がるといつか、呆れるというか。

「何か言ったか？」

「な。ふしゅ」べつに。さて、あたしも休ませてもらうかね。背囊で擦れた背中が痛くて痛くて。

年寄りくさい台詞を残してユッセルノも歩き出す。ふと、家の入り口で彼女が振り返った。

「にやあ、にやあお！」ほら、あんたも早く来て休むんだよ。むやみやたらに命を投げ出そうとする育ての親に、こっちは毎度冷や冷やさせられてるんだからさ！

そう言つて、ユッセルノは家の中に消えた。ダカームは頭をかく。子猫のときから一緒にいるが、最近は可愛らしさを通り越して貫禄がでてきた。彼女の気つぷの良さは頼もしいが、あのきつい物言いはいかかなものか。いや、もしかしたら自分の言動が移ったのかもしれないなとダカームは思った。

「まったく」

彼の顔に、滅多に浮かばぬ苦笑が漏れた。それは家族とともにいるからこそ、浮かぶ表情であつた。

翌日。

スイの体調管理や装備の確認で、家族の中で一番最後に寝入ったダカームは、ユッセルノの強かな尻尾の一撃で無理矢理叩き起こされた。

「……ずいぶんな挨拶だな」

「にゃお！」んなこたいいから、早く！ 外だよ、ダカーム！

珍しく取り乱した様子の相棒を見て、一気に眠気を飛ばす。彼女に続き外に出ると、陽光が白い山肌に反射して目に突き刺さった。軽く呻いて、辺りを見回す。近くにスイも立っていた。蒼穹を見上げると、昨日と寸分変わらぬ姿で『神の目』があった。

「……何だ？ 神の目に変化があったわけじゃないのか？」

「にー！」違うよ、ほら、あそこさ！

ダカームは眉をひそめ、尻尾で示された先を見た。そして絶句する。

今いる頂上からなだらかに下っていく白い稜線、そのすぐ脇の開けた斜面に、巨大な半球状の物体ができていたのだ。見晴らしの良い場所である。昨日の段階で見過ごすはずはない。昨日から今日にかけて、突如として現われたのだ。

水面<sup>みなも</sup>に七色の油を滴らせたように表面がゆっくりと揺らめいている。そのせいか球の内部を外から見るができない。数百人は余裕で収まりそうなほどの巨大さだった。

「あれは何だろうね……」

「……<sup>シェミニ</sup>領地」

「え？ 何？」

スイが首を傾げる。ダカームとユッセルノは互いに緊張した面持ちを崩さない。スイが焦れた。

「あれが何なのか、知ってるの？ ダカーム？」



「にやにや……」暢気だね、おまえは……。

「え？ え？」

「『捧得者』と『住人』がいるところ。そう言えばわかるな？」

しばらくぼかんとしていたスイは、直後「ええっ！？」と大声を上げた。

「捧得者」つて、じゃあまさか、あれが噂に聞いていた？ ぼくたち

「移人」には見ることも入ることもできないっていう」

ダカームはうなずいた。

『領地』 それは神によって作られた絶対領域。世界から隔絶し、その姿を常人は見る事ができず、かの地を覆う特殊な防御膜によって、獣からも、人からも、気候からも、そして嵐からさえも完璧に守られた、まさに地上の楽園とされる場所だ。この世のすべての人々が憧れる領地、そこに住まうことができるのは二種類の間人すなわち『捧得者』と『住人』だけである。

『捧得者』とは、神から領地を与えられ、そこで絶対的な影響力を誇る主のことをいう。『力を捧げ、安寧を得た者』という意味だ。捧得者は、それにふさわしい力を持った人間が神によって選ばれ、そして必要な契約とともに領地へと導かれることで誕生する、とされている。一方の『住人』は領地で生まれ、あるいは居住することを捧得者から許可された人々を差す。

これに対し、ダカームのような者を『移人』という。領地に住むことができず、さりとてどこかに定住することも叶わず、嵐と獣の危険の中をただひたすら放浪する人々。この中には、かつて住人として生活しながら領地を追い出された者たちも含まれる。

移人に完全な平穏などない。常に、戦や嵐と隣り合わせだ。

そんな彼らにとって捧得者や住人は文字通り別世界の存在である。「でも、それだったらどうして急に……。普通領地つて、みんなが押し寄せてくるのを避けるために、ずっと姿を隠しているものだった聞いたけど」

そう。領地を求める移人は数多いても、実際にどこにどういった

領地があるのかほとんど誰も知らない。時折現れる『住人崩れ』からおおよその状況や位置を聞き出すくらいが関の山である。

にもかかわらず、領地の方から姿を現した。何の前触れもなく。これは一体どういうことか。

ダカームは蒼穹を見上げた。浮かぶ神の目に挑戦的な視線を投げかける。

後は自分で何とかしてみろと。そう言っているつもりか？

踵を返し、家にしまっていた背嚢を引っ掴む。いまだ呆けたように領地の威容を見つめるスイに声をかける。

「スイ。支度しろ。乗り込むぞ」

「はい？ って、ちよつと！ 待ってよダカーム！」

「にやにやつ」ほら、ぼさつとしない！

父と義母に急かされ、スイは慌てて家に駆け込む。彼が戻ってくる間、ダカームはいっそう表情を険しくした。

ホセの山頂に領地があったとは初耳だ。領地内であれば、もう家族が嵐に悩まされることもない。神が仕組んだことだろうとなかろうと、この機会は必ずものにしてみせる。

「たとえ力尽くでも、な」

ダカームは右腕を押さえた。そこには幾重も包帯が巻かれている。薄汚れた包帯の下にある自らの力の証を、彼は慎重に撫でた。

領地の前に立つと、改めてその偉容さに鳥肌が立つ。

ダカームは家族に頷きかけると、七色に揺らめく膜にそつと手を差し伸べた。人差し指が触れ、表面にわずかな波紋が広がる。そのまま慎重に手を押し出すと、さしたる抵抗もなく肘まで沈んでいった。

勢いをつけて、飛び込む。視界が刹那、白く染まった。直後に濃密な空気が肺の中に入り込み、ダカームは何度もむせた。

スイとユッセルノが続いて領地内に侵入したことを確認し、改めて周囲を見回す。

「……う……お」

無意識の内に詠嘆の声を漏らしていた。ダカームには、ひどく珍しいことだった。

領地内から見た空はホセ山頂と同じように深い蒼だ。地表の白い砂も、なだらかな稜線もそのままである。違うのは、山頂と比べ明らかに濃くなった空気と、心地良い風と、そして見上げるほどに巨大な建造物だった。

家をいくつもいくつもつなぎ合わせ、積み上げていったといえはわかりやすいだろうか。『家の塔』<sup>オヒクフ</sup>とも呼ぶべき建物の表面は、緑を基調としながら、時折薄い青にも白にも変化していた。家と家との間は蔓を絡ませてできた通路で繋がり、複雑に行き交っている。まるで見た者を威圧するために存在するかのよう、ひたすら大きく、複雑で、ひとつだった。

人の姿が見えた。みなゆったりと歩いている。移人のような気忙しいさは、ない。

「これが、領地……。あれが、住人……」

「行くぞ。スイ」

「……へ？ え、でも、行くなって、どこへ」

「決まっている。捧得者のところだ。俺たちが領地内に入ったことはもう相手も知っているはず。話をつけてくる」

「にゃお」あたしらを住人してくれるように、だね。

ユッセルノが髭を震わせる。スイが不安そうに言った。

「でも、いきなりそんなこと言って、聞いてくれるかな……」

「にー。にゃお。なー」駄目なら端から領地内に入れていないよ。

それなりに興味を持たれているってことだ。理由はわからないけどね。

「そつ、か。そつだよね」

「みゃう」そつ。だからダカーム。

「何だ」

「みゃああつ。ふー」頼むから力尽くで何とかしようなんて馬鹿なことを考えるんじゃないよ。あんたならやりかねない。

ダカームは無言だった。あらかじめ予想はしていたのか、ユッセルノは不機嫌そうに尻尾を左右に振った。

連れだつて歩く。とりあえず入り口はどこかと見回していると、家の塔から出てきた住人の男性と出くわした。明るい声が、相手からかけられる。

「やあ。その格好、もしかして君たちは外から来た人間かい？」

「……」

「ええ、そうです。ぼくたち外から来たんです。……返事くらいしなよ、ダカーム」

スイの小声の注意にもそつぽを向く。住人は気にした様子もなかった。

「そつか。それは凄いな。領地に入れたのも納得だ。ほら、ここつて辺鄙なところにあるじゃないか。滅多に人が来ないんだよね。だからかな、ホセの山頂まで登ってきた猛者には、ミウエ様は寛大なんだ」

「ミウエ様？」

「知らないのか？ この領地、オコニサの捧得者様さ」

笑顔のまま住人は饒舌に話す。親しげに応対するスイの傍らで、ダカームはじつと住人の男を観察していた。

年齢はダカームよりかなり上、初老にさしかかった辺りだろう。スイ以上に線が細い。無駄な肉はないようだが、鍛え抜かれた感じもしない。何より殺気が皆無。人畜無害で相手を疑うこともしない。戦いになれば、おそらく一瞬で片が付く。そうだ、いつそのことこいつに捧得者の元まで案内させれば、手間が省けるのではないか。物騒な思考に沈んでいると、目敏く感じたスイに横腹を叩かれた。息子に叱られ、不承不承で引き下がる。ユッセルノが「ほれ見たことか」といった顔でにやごなこと鳴いていた。

父と違い人好きのするスイは、すっかり打ち解けた様子で住人の男と話し込み始めた。

「おじさんはここに住んで長いの？」

「まあね。かれこれ二十年にはなるかなあ。私はとても運が良かったんだよ。若いときに仲間に連れられて、幸運にも住人になることができたらしいから」

「らしい？」

「当時のことはよく覚えていないんだ。すまんね」

「そうなんだ。ミウエネ様っていうんだっけ。ここの捧得者様はどんな人なの？」

「うーん。ミウエネ様は最近代替わりされたお方だから、私も詳しくはわからない。でも気さくな方ではあったね」

「え？ 捧得者って代替わりができるの？」

「そうさ。住人の中で仕合をしてね、相応しい力を見せつけた者が儀式を経て、次の捧得者の地位を引き継ぐのさ。まあ、捧得者様を通じて神に認められる必要があるから、単純に力が強い弱いだけで決まるものじゃないらしいけれど」

「へえ。そうなんだ。あれ、でも引き継いだ後の捧得者様はどうするのかな？ やっぱりのんびり暮らすとか」

「それがねえ。ここ二代ほど、捧得者様が不在だった時期があった

んだよ。いや、不在というより私たちの前にお姿を現さなかったというか。だからお名前も知らないし、どこにいかれたのかもわからない。ただ、今はミウエ様が捧得者の地位に収まっているから、ちゃんと継承はされたのだと思うけど」

「そんなことがあったんだ」

「あんまり大きな声で言っちゃ駄目だよ？ ミウエ様、この話題に関してはあまりいい顔をされないみたいだから。私たちも、思うところがあってもあえて口にしていないんだ。下手に怒らせようものなら、領地から追い出されてしまうからね。ミウエ様がいくら寛大なお方でもさ」

「なるほど。ところで、そのミウエ様の居所なんだけど」

実にそつなく情報を聞き出していくスイ。これは自分には到底真似のできないことだとダカームは思う。どこで身に付けたのか、甚だ疑問だった。

しばらくして住人との会話を終えたスイは満足げな表情で戻ってきた。

「いやー、面白いねやっぱり。……あれ、どうしたのダカーム？

何か機嫌悪そうだけど」

「……別に」

「にゃお」家族以外であんたが親しそうにしている姿が気に入らないのさ、こいつはね。

どん、と尻尾を踏みつけようとするがあっさり躲かれてしまう。

スイは笑った。

「ミウエ様様の居場所がわかったよ。あの大きな建物が一番上にいるんだって。そんなに道は難しくなさそうだから、早速行ってみようよ」

「……ふん」

鼻を鳴らして歩き出す。「大人げないね」とユツセルノに言われるが、ダカームは黙っていた。

当たり前だろう、と心の中で愚痴る。

今まで、どうやったら家族と平穩に暮らせるかということばかり考えてきた。スイの行く末を案じてきた。目の前の困難を自分たちの力だけで乗り越えてきた。そんな自分に、どうやって他人を思いやる余裕を持てというのか。

優しさを家族だけに注いできたから、今、こうして生きていられるのだ。少なくとも、自分はそれ以上のことができるほど器用ではない。

「……ダカーム？」

「何でもない。ちょっと考え事をしていただけだ」

心配そうにこちらを見るスイに首を振った。困難な闘いに身を投じる前の緊張感を持って、ダカームは表情を引き締めた。

家の塔の根元にいくつか大きな入り口があった。スイの案内で、最も大きい正面中央の入り口へ進む。

その足が、ふと止まった。

人通りが多くなった場所である。オコニサの住人たちは互に行き交いながら、時折ダカームたちに会釈をする。移人とは違うゆったりとした雰囲気。その穏やかな雑踏の先に、一人の少女の姿を見た。

目指す入り口から左に外れた、家の塔の外縁近く。そこに長く放浪する移人でもまず身に付けていないような襷褌を着て、少女が力なく地面に横倒れになっていた。微動だにしないところを見ると、死んでいるのかもしれない。近くを行き交う住人たちは誰も見向きもせず、それどころか気付いてもいないようだった。

「ぼく、行ってくる」

ダカームが止める暇もなく、スイが駆け出す。ため息を落とし、ユッセルノを連れて後を追う。

近くまで寄って、ダカームは軽く息を呑んだ。

少女は珍しい漆黒の髪をしていた。濡れた獣の毛並みのように艶やかで、それでいて柔らかく地面に広がっている。剥き出しの手足はひどく汚れていたが、その下は日焼け知らずの白さを持っている

ことが容易に見て取れた。スイより一回り小さく、十をいくぶん越えた程の年齢に思えた。

彼女は雑踏の方に顔を向けて倒れ、手足を力なく投げ出していた。指先一本動かさないのに、目だけは爛々と見開いて、自分を無視して歩く住人たちを見つめていた。

髪と同じ漆黒の瞳だけが不意に動き、ダカームたちを捉える。彼女は生きていた。

「君、大丈夫？」

スイが手を差し伸べた。だが少女は反応せず、じっとこちらを見つめている。少女の体調を見ようとスイが体に触れても、彼女は嫌がる素振りも見せずただ横たわっている。しばらくすると小さく身じろぎし、少女は体を起こした。その拍子に、肩に引っ掛けていただけだった襷褌がずり落ちる。

「わわっ」とスイが慌てるが、少女の方は動じなかった。困った拳句、スイは背囊から防寒用の獣の皮を出し、少女にかけた。

「スイ。余計なことは……」

「駄目。いくらここが気候がいいからって、このままじゃ可哀想だよ」

不機嫌さを滲ませたダカームの声に、スイは言った。こうもはっきりと反論されるとダカームとしては黙り込むのが常だ。

なおも彼は少女との会話を試みる。しかし上手くいかない。まったく反応がないのだ。そうこうしている内に少女は立ち上がり、ふらふらと頼りない足取りで家の塔へと向かう。そして途中でまた倒れる。彼女が向かう先に小さな入り口があり、そこから微かに水音が聞こえた。どうやらオコニサの地下にある水場へ向かうつもりのようなのだ。

「ダカーム、ちょっと」

「駄目だ。そんな得体の知れない者に構ってる時間はない」

「でも、放っておけないよ」

予想通りの反応に、ダカームは内心で深いため息をつく。本当な



ら、住人すら見向きもしないような人間に構って欲しくはない。どんな危険があるのかわかったものじゃない。

「仮にも住人なんだから、生命にかかわるようなことはないだろう。俺たちが心配することは何も無い」

できるだけ穏便な言葉を選んだつもりだったが、スイには伝わらなかった。

「にやお。なー。んにゃー」仕方ない。あたしがこの子につくよ。

あんたは捧得者のところへ行っておいで、ダカーム。

「いいの？ 母さん」

「おいユツセルノ、そんな勝手に」

「なー。なー」お前たちは一度こういう状況になったら、いつまで経っても平行線なんだから。ほら、行った行った。

「しかし……」

「うるる……うるる……」なんだい、あたしじゃ不満だってのかい？ 強かにぶつよ？

尻尾を鞭のようにしならせるユツセルノに、ダカームはまたも重いため息をつく。

「……スイ、捧得者の居場所を」

「ダカームもぼくたちと一緒にいればいいのに」

「知らない奴の世話は苦手なんだ」

思わず本音を漏らすと、スイはやれやれと肩をすくめ、家の塔の最上階への道のりを教えてくれた。基本的に中央部分を上へ上へと目指すだけでよいということ把握したダカームは、スイとユツセルノを残して塔の中へ足を踏み入れた。

一步入ると、内部の広さと明るさに圧倒された。複雑に入り組んだ通路とどこまでも上へと続いてく壁を目の当たりにし、ここが自分たちの生きてきた世界とはかけ離れた場所であることを身に染みて理解した。

蔓が絡み合った階段の一段目を一回、二回と踏みしめる。大丈夫だと確信してから、ようやく登る。我ながら呆れるほどの慎重ぶりだった。

螺旋状に続く階段をひたすら上がっていくと、途中、何度も人とすれ違った。皆穏やかな表情で挨拶をしてくる。ダカームが無視しても嫌な顔ひとつしない。だが、それより気になるのは彼ら彼女らの体付きだ。適度に引き締まっている。荒事に染まってはいいないが、それなりに鍛えていることが見て取れた。『平穏な環境のもと、住人は互いに切磋琢磨し、丁寧に鍛え合う』という話を聞いたことがあるが、本当なのだなと彼は思った。

どれぐらい登っただろう。心持ち頭上から降り注ぐ灯りが強くなつたと感じたときに、階段の最後が見えてきた。

立ち止まる。誰かいた。

階段に腰掛けていた男が一人、立ち上がってこちらを見た。長身だった。赤短髪で、図体の大きさに比べて驚くほどぱっちりした瞳のせいか、憎めない愛嬌がある。二の腕など素晴らしい筋肉の付き方をしている一方で、やけに肌艶が良いことにダカームは気付いた。「やあやあ、いらっしやい」

男は実に親しげに　ダカームにとってはひどく馴れ馴れしく声をかけてきた。無言のまま男に近づくと、彼は警戒することなくひらひらと手を振った。

「待ってたよ。あんたが今回外から来た移人さんだね？」

「……あんたがミウエネか」

「その通り。オコニサの守り人、捧得者ミウエネ様さ」

ミウエネはそう言うと、いきなりダカームの肩を抱こうとした。彼は慌てて振り払い、距離を取る。何をする、と視線で警告を発した。すると何が可笑しいのか、ミウエネはからからと笑い出した。

「いやあ、すまんすまん。ついいつもの癖で。だがほら、ああやって肩を抱くとお互い親近感が生まれると思わないか？ ん？」

「余所でやれ。俺は好かん」

「はつきりしていて結構。あんたは移人の中でもかなり硬派な人間と見た。ということで、そろそろあんたの名前も教えてもらえると助かるんだけど」

ダカームは辺りを見回した。最上階は捧得者の居室ということとは他の住人も承知しているのだろう。人影はない。階段を登り切った先は狭い露台となっていて、同時に大きな『家』の入り口にもなっている。

そこまで確認したダカームは、おもむろにミウエネに近づいた。首を傾げる彼の肩に右手を当て、そのまま壁に押し付けた。ミウエネがぐぐもった声を出す。腹の底から響く低音で、ダカームは恫喝した。

「あんたがどうやって住人を選んでいるかは知らない。だが、この俺をここまで呼び寄せた以上、あんたの選択肢はひとつだ」

「……こりゃ驚いた。いきなり捧得者を脅すのかい」

「ここの住人は観察させてもらった。どいつもこいつも俺の敵にはならない。恨むなら、そんな鍛錬しかさせてこなかった自分のやり方を恨むんだな」

「捧得者自身がキミより数倍強いという発想はなかったのかな？」

「あんたひとりならどうとでもしてみせる」

「なるほど」

強硬な態度を取っているにもかかわらず、ミウエネは楽しそうな表情を変えなかった。

「で、一応聞くけど、キミの要求は？」

「俺たち全員を住人として認め、オコニサに居住させること。そして将来的には、俺の連れに捧得者の地位を譲ること。それが叶わないなら、絶対に俺たちを放逐しないことを確約しろ。今、この場で」  
「ふうーん……」

ミウエネの目が細まる。ダカームは眉をひそめ、直後に気配を察してミウエネの体を振り払う。だが、遅かった。背後から伸びてきた床の一部が蔓となって絡みつき、宙づりにしてきたのだ。

「領地の中は捧得者の意のまま。情報不足だったね。無理もないけど」

「く……！」

すると蔓の一本がダカームの右腕に伸びてきた。巻かれた包帯を一気に剥ぎ取る。擦れてわずかに血の滲む腕には、縦に歪んだ二重の円の模様が黒く浮かんでいた。人の目を極限まで簡略化したような図柄だった。

「これがあんたの預言<sup>コメツク</sup>ね。はあん……なるほど」

「言いたいことがあるなら、はっきり言ったらどうだ」

「じゃ遠慮なく。あんた、『単構造<sup>ツカメウク</sup>』持ちだったんだね。どうりで粹がるわけだ。下層の人間とされては、そりゃ不安にもなるわ」

くつくつ、とミウエネが笑む。

生きとし生けるものほばすべてに与えられる神からの授かり物<sup>コメツク</sup>  
預言。

ダカームの預言にあるような図柄を、人は『単構造<sup>ツカメウク</sup>』と呼ぶ。

預言は大別すると二つに分類されるが、『単構造』の預言はもつとも基本的で、かつ下位のものとしてされている。単構造のものはごく低級な動物か、あるいは植物に与えられることがほとんどだからだ。極論すれば、単構造の預言を持つ人間などそこらに生えている雑草と同じという認識なのである。

実際のところ、預言について人々が知ることは多くない。理由は単純だ。知る方法がないからである。また、たとえ謎を解き明かしたところで、その日の生存が保証されるわけではないからである。

いきおい、これまでの経験則からものを語ることになる。

預言とは生物としてどれだけ優れた身体能力を発揮できるかを表すものであること。

預言の図柄が複雑であればあるほど、高い能力を発揮できること。数ある生命の中で、人間がもつとも複雑で美麗な預言を持っていること。

人々が知っているのはこれくらいである。

「神から与えられた烙印に納得できず、ひたすら牙を研いで辺り構わず噛み付き続ける。実に哀れだ。獣そのものだね」

「黙れ」

「なぜ？ 楽しいじゃないか。オコニサの住人はみない奴だが、面白みに欠けるんだよ。まあ、義務だから彼らの身は守るけどさ。その点、あんたみたいな人間は領地にはいない。実に虐めがいがあるし、面白い。もちろん俺が」

「お前みたいな奴が捧得者とはな……！」

吐き捨てると、ミウエネは口の端を引き上げた。言葉通り、楽しくて楽しくて仕方ないという顔に見えた。

「適度に鈍感なのがまたいいね。実にいいよ。ほらあんた、名は？」

黙っていると全身がぎり、と鳴った。絡みつく蔦が拘束の力を一気に強めたのだ。ダカームは呻き声を精神力で抑え込んだ。

「じゃあ適当に『落ちこぼれ（ヒアノコヒ）』とでも呼ぼうか。あんたは」

「ダカームだ。勝手に名付けろんじゃない」

「はい、素直じゃなくてよろしい。ではダカーム。詳しいことは中で話をしようか。光栄に思ってくれよ、俺は滅多に自分の家に他人を入れないんだ」

「その前につ、これを、解け！」

「はっは、そんなつまらないこと誰がするか。さ、ご招待ご招待」

上機嫌のままミウエネは家の中に入っていく。その後を、蔦に拘束されたままもがくダカームが続く。

家の中は眩しかった。正面に開けられた吹き抜けから陽光が容赦なく入ってくる。逆に壁と天井は光を遮る仕組みになっていた。よく目を凝らすと、床が薄緑色に発光している。気味が悪いところだとダカームが眉をしかめた瞬間、蔦が急に激しく動き出した。重しを付けた投げ縄のように一回転すると、そのままダカームの体を壁面に向けて叩き付けた。咄嗟に背中を向けて体を守ろうとするも、直後に再び別の場所に叩き付けられる。喉の奥から勝手に空気が出て行った。

「……ごほっ！」

「へえ……凄いな。思ったよりずっと頑丈だ。ホセを登頂した直後にこれだったらいしたものだ」

「く、そ……」

「どれどれ」

脱力して地面に伏すダカームにミウエネが近づく。品定めするように眼前に屈み込んできた。興味深そうに覗き込んでくるミウエネには、警戒心が皆無だった。

がつ、と歯を食いしばる。右腕の預言に神経を集中させ、そこに秘められた熱を一気に解放した。全身に横溢した力を使い、蔓が再び拘束の力を強める前にミウエネの頬に強烈な蹴撃を放った。

おそろしく軽い感触。ミウエネが軽石のように吹き飛んだ。同時にダカームを拘束していた蔓が緩む。息を整え、彼は捧得者の男に近づいた。

「おお、痛い」

「！」

何事もなかったように体を起こすミウエネ。傷ひとつない顔を実に嬉しそうに歪めた。ダカームは畏怖を感じて吐き捨てた。

「くそ。化物め」

「……おい、その言葉はいただけないな」

ミウエネの顔から喜色が消える。途端に不機嫌になった彼に、ダカームは面食らった。

「捧得者に蹴りを入れる気魄のある人間が、たった一撃で怖じ氣づいてどうするよ」

「怖じ氣づいてなどいない！」

「そうそう。そういう風に粹がつてくれなくちゃ。その他大勢と同じ小物になつてもらつては困るんだ。ここに招いた意味がなくなる」

「……何を企んでいる？」

ダカームは訝しんだ。どうも様子が変だ。遊ばれているようにも何かを試されているようにも感じる。ミウエネが再び近寄つてきた。「さつきも言つたが、俺は滅多に人を家に呼ばない。つまり今、ここには俺とあんたのふたりだけだ。そこまではいいな？」

肩に手を掛けてくる。生理的な嫌悪感が首の裏から全身に広がつた。黙つて拳を握る。静かに臨戦態勢を整えるダカームに、ミウエネは再び氣をよくしたようだった。

「俺はあんたが氣に入つたんだよ。捧得者に喧嘩を売る度胸といい、単構造のくせにあの怪力といい、他の人間には一切頓着しない冷淡さといい、最高だ。苦勞してホセを登つてきた理由つてのが、神に『嵐をなくせ』と言いたいがためつても、馬鹿っぽくて好みだ」

「見ていたのか」

「捧得者の力を舐めてもらつては困るね。ついでに言えば、ここに来るまでにいかにあんたが連れを大事にしてきたかつてのも見てる」

全身に緊張が走つた。相手を射殺すつもりで睨む。だがミウエネはあつさりを受け流した。

「安心しろよ。あんたの連れ……スイとユッセルノだったか？ 彼らをどうこうするつもりはないよ。まだ」

「まだ……？」

「あんた次第つてことさ、ダカーム」

体を震わせながら囁くミウエネ。まるで長年言いたくて言いたくてたまらなかつた台詞を吐き出したような、至高の喜びに満ちた顔だった。

こいつは危険だ。誰よりも危険だ。

「そう警戒するなっ」

「……」

「これから話すことにあんたが頷いてくれれば、連れの安全は保証する。それどころか、あんたにとっても良い話をするつもりだ」

「もったいぶらずに話せ」

「おや、意外にあっさり信じるんだな。もつと悩むかと思ったが」

「お前がどういう意図を持っていようと関係ない。お前は家族の安全を保証し、俺たちにとって有益な情報を出す。それ以外の行動は許さない」

「ほお……いいとこ取りってか。あんた、俺のこと警戒しているわけには大胆だ。それとも真正銘の馬鹿か？」

「俺にとつて、お前も家族が平穩に生きるための道具だ。その扱いに命をかけるかどうかは俺が決める。お前がどう考えようと無駄だ」

刹那の沈黙。完全に虚を突かれたミウエネは、次の瞬間盛大に笑い始めた。

「……ぷはっ。ははははっ。こりや驚いた！ あんた凄いや！ 紛う事なき大馬鹿者だ！ ますます気に入った！ このまま放逐するのが惜しいくらいだ」

「放逐……！？」

「うちに落ちこぼれは必要ないのでね。単構造の人間だと分かれば問答無用で追い払っているのさ。ま、実際単構造の奴らにろくな人間はいなかったし、ここにいる資格なしってことにしているんだよ。」

……おっと、拳はしまいなよ。まだ話に続きがある」

ダカームは厳しい目でミウエネを睨んだ。

「お前が俺たちを放逐するなら全力で抵抗してやる」

「……ということは、あんたの家族も似たような預言を持っているんだな。予想通りというか、あんた見事に口下手だね。ダカーム」

「……」

「ま、俺が話したいのはそんなことじゃない。何度も言ったが、俺はあんたが気に入った。だから俺の願いを聞いてくれたら、特別に



住人として認めようと思う。それだけじゃない。捧得者としての俺の力を少しだけ分けてやろう。これで捧得者になれる可能性はぐっと上がる。有り難く思っただけいい」

「偉そうに」

「実際に偉いんだから仕方ない。で、だ。俺からはふたつ、あんたにしてもらいたいことがある」

「ふたつ、だと」

「おう。ひとつは手間はかかるが大した用事じゃない。世界に散らばる捧得者ができるだけ多く、探し出して欲しい。そのための手段も用意する」

ダカームは眉をしかめた。ミウエネは片目をつむった。

「先に言っておくが、理由を聞くななんて野暮なことはいしなくていいよ。どうせあんた、そんなことはどうでもいいとか思ってるんだろ？」

「……探して、どうするんだ」

「何も。要はどんな奴がどこにいるか大体把握できればいいんだよ。報告の手間は考えなくていい。あんただって、これから捧得者になることを考えてるなら、後学のために実物を見ておいて損はないぜ？」

「目の前のひとりで十分だ。これ以上顔も見たくない」

「自分で言うのも何だが、俺みたいなのは珍しいと思うぜ。まあ事実がどうか知らんけど」

惚けたことを言うミウエネから目を逸らし、ダカームは考えた。捧得者という存在は、移人だけではなくて捧得者同士からも独立しているのだろう。住人を懐に抱えているとは言え、ある意味、孤高の存在なのだ。

「ちょうど良いではないか。余計な繋がりなど不要だ。自分と、スイト、ユッセルノさえ庇護できればそれで十分だ。」

「とりあえず最低でもひとり。領地の場所と、捧得者の人となりを掴んできてくれ。できればそいつが初代の捧得者なのか、それとも

世代交代した後になるのか、それを知ることができればなおいい」

「……結局俺を領地から追い出すことに変わりはないわけだな」

「俺は領地から離れられないからねえ。やり方はあんたに任せるよ。首を長くして待つてゐるから」

「ふん」

鼻で返事をしながら、ダカームは情報を記憶に刻んだ。捧得者は領地から離れられない。ミウエネという男に限って『自分が空けると残してきた住人たちが不安だ』などという殊勝な理由はないだろうから、根本的に領地から出る手段がないか、もしくは出る方法はあるのもそれが益にならないかのどちらかだろう。

ミウエネは爛々と瞳を輝かせていた。ダカームの思考を読んでいるのか、愉しそうな、それでいて挑発するような視線を向けてくる。彼は言った。

「さて。肝心のもうひとつの条件だが」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5313z/>

---

嵐世の家

2012年1月10日18時54分発行